

くがつとうか  
すがわらのみちざね  
九月十日（菅原道真）

きよねん  
去年の  
こんや  
今夜  
せいりよう  
清涼に  
じ  
侍す

しゅうし  
秋思の  
しへん  
詩篇  
ひと  
独り  
だんちよう  
断腸

おんし  
恩賜の  
ぎよい  
御衣  
いま  
今  
ここ  
此に  
あ  
在り

ほうじ  
捧持して  
まいにち  
毎日  
よこう  
余香を  
はい  
拝す

去年今夜侍清涼  
秋思詩篇濁断腸  
恩賜御衣今在此  
捧持毎日拜餘香

解説 この詩は九月十日の夜、道真が九州の配所で菊花を見るにつけ往時を回想し自分の忠誠を吐露したものだ。

語釈 ※去年今夜：醍醐天皇の延喜元年の前年、昌泰三年の九月十日の

夜、九月九日の重陽日。※清涼：宮中の殿名。紫宸殿の西側にある。

※秋思：秋の悲しみ。※恩賜御衣：帝からいただいた御衣。

※断腸：はらわたがちぎれるほど悲しいこと。※余香：移り香。物に移り残った香。

通釈 思い起こせば、ちょうど去年の今夜は清涼殿で御宴に侍っており、他の臣たちとともに「秋思」の勅題を奉じて詩を作ったが、その折、心に憤り悲しむことがあったせいも、自分の詩だけが腸もちぎれんばかり悲しい思いに満ちていた。その詩が思いがけなく陛下の御感にあずかり、お召しの御衣を手ずから賜わった。その御衣はいまここにあり、目ごとく捧げたてまつって移り香を拝し、ひたすら天恩の厚きを感じ入っているのである。